



筑紫女学園大学リポジト

トートロジーの意味の生成過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000034

トートロジーの意味の生成過程

緒方隆文

A Categorical Approach to Japanese Tautological Expressions

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿では「XはXだ」のようなトートロジーの意味生成過程を、カテゴリー分析で考察する。この表現では、主語Xと同じ名詞句表現が述語にも現れ、繫辞で結ばれる。ここでは緒方(2006)での考察を発展させつつ大きく修正する。緒方(2006)では、トートロジーは強調表現の一種であり、カテゴリーの再確認・再定義をする構文とした。そして内部背景化と外部背景化の2つのプロセスがあるとした。本稿でも内部背景化と外部背景化は基本保持しつつも、トートロジーとカテゴリーの関係を見直し、4タイプ(内部背景化2種類、外部背景化、内部外部背景化)があるとする。最終的には以下の質問に答えることを目的とする。

- (1) a. (問1) トートロジーは何を契機として、発話されるのか。
- b. (問2) トートロジーとは何か。
- c. (問3) トートロジーの意味生成のプロセスはどのようなものか。
- e. (問4) トートロジーは意味論と語用論のどちらで意味が決まるのか。
- d. (問5) トートロジーが話題を封じるのはなぜか。

結論として、問1に対しては、カテゴリーのゆれが契機となり、トートロジーが発話されるとする。問2に対しては、「XはXだ」は同定表現であり、主語Xと、述語Xは異なるものを指すと考えていく。具体的にはカテゴリーXとその個体成員 X_i を同定する。そしてカテゴリーXの再確認・再定義をする表現とする。問3に対しては、意味生成プロセスとして、2つのプロセスを提示する。一つはコンピュータ文における同定文としてのプロセス、もう一つはカテゴリーXの再確認・再定義の内容を定めるプロセスである。後者のプロセスでは4タイプあることを示す。問4に対しては、意味論的意味と語用論的意味の2つがあると主張する。最後に問5に関しては、トートロジーが形式上恒真表現となっており、含意として、強い否定の意味を持つことから、話

題を封じる働きを持つことを示していく。

以下2節でトートロジーの成立要件を見て、3節でトートロジーの意味の生成プロセス2つを見る。4節で再確認・再定義のプロセスを確認し、5節で4タイプのトートロジーを見ていく。6節でそれまでの議論を踏まえ、(1)の5つの問への返答を示す。そして7節で、ゆれの要因について見ることにする。

2. トートロジーの成立要件

トートロジーは形式的には恒真表現である。 $X=X$ と述べているので、常に真となり、否定できない。しかしXが指し示すものは、主語Xと述語Xで異なると考える。もし全く同じものであれば、伝達する内容はなにもなく、無意味な発話となってしまうからである。とはいえ「XはXだ」の表現であっても、有意味なトートロジーとして成立しない場合がある。(2)の表現は不自然である。何を伝えているか不明である。ここでは形式だけでなく意味においても恒真となっている。

(2) a. ??地球は地球だ。 b. ??空は空だ。 c. ??大理石は、大理石だ。 d. ??小石は小石だ。

不自然な理由は、ここでいうトートロジーの成立要件を満たしていないからである。ここでも緒方(2006)同様、トートロジーはカテゴリーXの再確認・再定義を行うと考えていく。(2)は、この再確認・再定義するための成立要件が満たされていない。トートロジーでは、もともとの定義に〈ゆれ〉が生じるとき、再確認・再定義が行われる。そのためカテゴリーのゆれがない、あるいはゆれを想起しにくいものはトートロジーとして成立しにくい。(2)に示す地球、空、大理石、小石は、地球に入るかどうか、空に入るかどうかなど、カテゴリーのゆれを想定しにくい。そのため再確認・再定義にいたらず、不自然な表現となる。何のための発話かが理解しづらく、何の意味も持つこともない。一つめの成立要件は、カテゴリーの〈ゆれ〉となる。言い換えれば、トートロジーは、カテゴリーの再確認・再定義をする表現ということが、この成立要件から分かる。むろん(2)であっても、文脈により〈ゆれ〉の状況を作れば、すべて適格なトートロジーになる。

二つめも同様に、トートロジーがカテゴリーの再確認・再定義をする表現から生じる。確認・定義に「再」が付いていることから、少なくとも話し手が、通例は話し手・聞き手両方とも、Xについての事前知識が必要となる。Xをすでに知っているからこそ、〈再〉確認・〈再〉定義が可能となる。カテゴリーXの再確認・再定義をするとは、いわば定義の仕切り直しであることから、両者が全く知らないもの、あるいは知らないと明言すれば、もはやトートロジーにはならない。(3)ではY2Kやメタバースを知らないと明言しているため、不自然になっている。

(3) a. ?? Y2K は初めて聞いたが、Y2K は Y2K だ。

b. ?? メタバースは全く知らないけれど、メタバースはメタバースだ。

この反例になりうるものに、説明拒否の意味を持つトートロジーがある。むろんすでに知っているで説明拒否をする場合が多いが、知らないのを隠して、トートロジーを用いる場合も想定される。

(4) a. 子供：姦淫ってなに？

母親：姦淫は姦淫。子供はそんなことは知らなくていいの。 (坂原 2002 : 107)

b. A : Y2K って何? B : Y2K は Y2K だ。

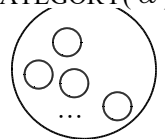
説明拒否のトートロジーでは、話し手が X を知っているのか、知らないのかは客観的には分からない。実際(4b)では、B が Y2K について知らなくても、発話できる。ただ知らなくとも、知っている体で発話している。そのためここでも少なくとも発話者は、X について知っている (知っているふりをして) ことが前提となっており、知っているが故に、〈再〉確認・〈再〉定義が可能となる。この説明拒否については、後述する。

以上見てきたように、トートロジーには、カテゴリーのゆれと、すでに X について話し手が知っていることが、成立要件となる。この2つはどちらもトートロジーが、カテゴリーの再確認・再定義をする構文であることを示している。ではどのようにしてトートロジーは意味を獲得するのかというプロセスが問題になる。これを次節で見ていく。

3. トートロジーの2つの生成プロセス

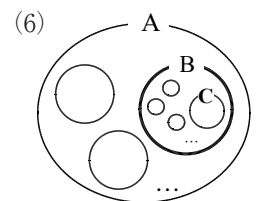
トートロジーの意味生成プロセスを見る前に、カテゴリーをどう捉えるかを示す。というのもトートロジーでは、カテゴリーが強く関わるからである。本稿でのカテゴリーの考え方を以下に示す。

まずカテゴリーは(5)に示すように、カテゴリーと成員からなる。大円 (5) CATEGORY(α) がカテゴリー、小円が成員を表す。カテゴリー全体にはカテゴリーラベル (以下ラベル) が付与されるが、一時的なものなど、ラベルがないこともある。



成員には2種類あり、属性成員と個体成員がある。属性成員とは、そのカテゴリーが持つ属性や特性を表す。一方個体成員とは、他と区別され個体と認識されるものになる。単なる個体ではなく、サブカテゴリーを指すこともあるし、抽象的なものをさすこともある。例えばイチローであっても、今日のイチロー、1年前のイチローなど分割されれば、個体成員と見なしていく。属性成員であれ、個体成員であれ、どちらにもプロトタイプ効果が存在する。なお成員に前景化が起こる場合、属性成員と個体成員の両方が前景化されることはなく、どちらか一方のみが前景化される。

ただしカテゴリーか成員かは、あくまで相対的なものにすぎない。認識される範囲で、カテゴリーまたは成員のどちらにもなりうる。例えば(6)に示すように B は、上位カテゴリー A の成員であり、下位成員 C のカテゴリーでもある。あくまで見方の問題になる。



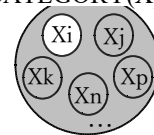
ここで注意しなければならないことがある。それはこのカテゴリーの中身は、個々人で異なるし、また、場面など状況によっても異なる。厳密には同じものはないと言える。例えばカテゴリー〈犬〉を考える。個体成員であれば、(飼い犬がいれば) [自分の飼い犬] がプロトタイプとなり、

属性成員であれば、(噛まれた経験があれば) [怖い] がプロトタイプとなることもあるだろう。個人的な体験だけでなく、地域や文化においても、カテゴリーの成員に多大な影響を及ぼす。

しかしこうした違いにもかかわらず、なぜ同一カテゴリー (例えば <犬>) を用いて、コミュニケーションが成立するのであろうか。それは共通と思われるものを前景化し、そうでないものを背景化しているからと考えられる。双方に歩み寄りがあるからこそ、コミュニケーションが成り立っている。つまり特殊なものを背景化し、相手と共通部分を想定し前景化する。そうしたカテゴリーを、その時その時で作成し直していると考えられる。つまりカテゴリーは、一時的で流動的と言える。

この流動的なカテゴリーのすりあわせが、トートロジーの働きになる。すなわちカテゴリーに <ゆれ> が生じたときに、成員となる構成員を前景化または背景化することで一つに決めていく。本稿ではこれをカテゴリー X の再確認・再定義と呼ぶ。これには2段階のプロセスが働く。

一つは同定文としての機能である。コンピュータ文では基本、記述か同定のどちらかを表す。トートロジーでは同定文として機能する。同定すると言っても、主語 X と述語 X は同一表現であるため、そのままでは恒真文となり、何の意味もなさない。恒真文が有意味になるためには、2つの X が異なるものを指す必要がある。スキーマ(7)で説明する。主語 X はカテゴリーとしての X を指す。カテゴリー X は、様々な定義を持つ X の集合体になる。流動的ゆえに、カテゴリーは数多くの定義(個体成員)を持つ。そして述語 X は、その一つの定義パターン (7) CATEGORY(X) である個体成員 X_i を表す ((7)では白丸で前景化されることを表記)。ただし主語と述語で X と X_i の指すものが反対になることもある。このカテゴリー X と、個体成員 X_i (X 定義の一種類) を結びつけ同定する。つまりトートロジーは、コンピュータ文を用い、同一語で結びつけることで、X が X_i と再確認・再定義をする構文と宣言する。この同定のプロセスは、コンピュータ文という形式からくる意味なので、意味論的意味となる。そのため構文として新たな情報を追加するための文ではない。



しかし X_i に再定義し直すと言っても、このままでは X_i が何か分からない。そのため語用論的に X_i の意味を定める必要がある。語用論的意味を定めるには、プロトタイプの X に、前景化・背景化を加えることで、意味を定める。この意味の規定、すなわち再定義と宣言された X_i を規定するプロセスを、2つめのプロセスとする。このプロセスは、カテゴリースキーマで提示される。ラディカル意味論(Wierzbicka 1987, 1988, etc.)、ラディカル語用論(Grice 1975, Levinson 1983, etc.)、そしてその複合的な意見(Fraser 1988, Gibbs and McCarrell 1990, etc.)が出され議論されてきたが、本稿では、意味論的意味と、語用論的意味の双方を兼ねたものがトートロジーと考えていく*1。この再確認・再定義のプロセスを、次節で考察する。

4. 再確認・再定義のプロセス

2つめのプロセス、再確認・再定義を考える。それに先立ち、まず定義そのもののプロセスを

考える。というのも再確認・再定義のプロセスは、定義と同じプロセスが再度おこるだけと考えるからである。そもそも定義とは、他と区別するために行われる。ここでは概念の内包を明瞭にすることで、その外延を確定するといった論理的定義ではなく、もっとゆるやかに通常の会話の中での確認・定義の方法を見ていく。代表的なものに、3つある。一つは(8a)に示すような、属性を述べるものがある。属性を述べることで他と区別する。二つめは(8b)のように、具体例を述べるものになる。三つめは(8c)のように、近い種類のものを否定する方法がある。

(8) a. マインドスポーツとは、高い思考能力を用いて競われるゲームを一種の「スポーツ」と見なしたものだ。(『ウィキペディア(Wikipedia)』(2024/5/10 17:15 UTC 版))

b. A: マインドスポーツって何? B: 囲碁、将棋、チェス、ビリヤードみたいなもの。

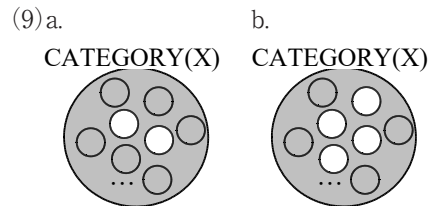
c. A: マインドスポーツって何?

B: 野球やサッカーみたいに体を使うスポーツじゃないもの。

まず(8a)であるが、属性で定義付けるとしても、Xの属性を全ては列挙できない。そのため代表的な属性が選ばれる。しかし3節で見たように、その選び方には、個人差もあるし、状況や場面でも異なる。もっと言えば、中心となるプロトタイプの属性さえ異なるかもしれない。とはいえコミュニケーションをスムーズに行うためには、会話の中では、共通性が高く、より一般的な属性と思われるものが列挙される。しかしカテゴリーの定義は常に流動的である。その状況(文脈)で、どの属性成員を選ぶか、またいくつ属性を選ぶかが問題となってくる。

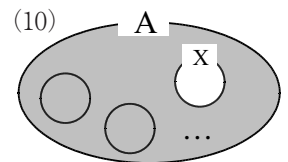
スキーマで言えば、前景化されるもの(選ばれる属性)、または背景化されるもの(選ばれない属性)を示す必要がある。図示したものが(9)になる。(9)で

は、2通りの前景化タイプを示している。2つは前景化される属性成員が異なる。(9b)は(9a)に比べて、より周辺的な属性成員を前景化する。つまり前景化・背景化のパターンはいくつもあり、どのパターンにするかゆれた



時、トートロジーで再確認・再定義が行われる。トートロジーは、その流動性を止める動きを行う。

次に(8b)だが、これは成員が個体成員の事例となる。個体成員を用いて定義づける。スキーマ自体は(9)と同じだが、成員が(8b)では個体成員になる。(8b)では成員の列挙が行われているが、トートロジーにおいては1個の個体成員が前景化され、同一指示される。文脈に左右されることも多い。最後に(8c)では、他者を背景化することで、Xが前景化される。ただし他者は、Xと何らかの関連性がなければならぬ。全く関係ないものを否定しても、Xの特定にはつながらぬからである。ここではXと他者が関連があることを、同じ上位カテゴリー A の成員であると表現する。図示したものが(10)になる。(10)ではXも背景化される他成員も、上位カテゴリー A の成員になっており、何らかの関係を持つ。



この上位カテゴリー A は、明確なカテゴリーではなく一時的なものも多い。したがってラベル自体がないこともある。重要なことは、前景化される X と背景化される他成員には何らかの共通

点、類似点があることにある。これを同一の上位カテゴリーの成員ということで表現する。

このことはトートロジーにおいてもあてはまり、(11)のような表現は、不自然である。

(11) a. ?? 犬は犬、ペンはペン。 b. ?? ダイヤモンドはダイヤモンド、風は風。

というのも犬とペン、風とダイヤモンドの上位カテゴリーが想定しにくいからである。言い換えれば関係がないものを背景化しても、トートロジーとして成立しない。

以上3種類の定義付けは、トートロジーにおける再確認・再定義でも同様に用いられる。言い換えればトートロジーにはこの3つの方法が用いられる(実際はそれ以外の用法もあり、全部で4つある)。次節で具体的に見ていく。

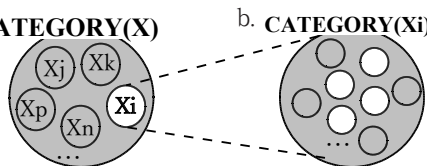
5. トートロジーの分類 (4タイプ)

ここではトートロジーの分類を行う。全部で4タイプある。最初の3つは、4節で述べた定義方法になる。一つめが(8a)に相当する。カテゴリー X 内部の属性成員を背景化して定めることから、内部背景化(属性成員)と呼ぶ。背景化されるものを〈〉部分で示している。二つめは(8b)に相当するもので、内部背景化(個体成員)と呼ぶ。ここでも同様に、カテゴリー X 内部の個体成員が背景化される。個体成員の背景化を〈〉で示している。よって内部背景化は成員の種類で2通りある。

次に(8c)に相当するのが、外部背景化(上位カテゴリーと他成員)になる。カテゴリー X の外側を背景化するため、外部背景化と呼ぶ。このとき上位カテゴリーを背景化し、かつ他成員を背景化する。最後に4つめは説明拒否のトートロジーになる。これはカテゴリーラベルのみ前景化し、外部も内部も背景化するため、内部外部背景化(上位カテゴリーと全成員)と呼ぶ。これは4節で述べた定義付けとは、種類が異なるが、プロセス自体は、他タイプと同じになる。

5.1 属性成員の背景化 [内部背景化(属性成員)]

まずすべてのトートロジーに共通するのは、3節で示した様に、2つプロセスがある。一つめはコンピュータ文の同定文としての機能である。主語 X と述語 X は表現としては同じだが、別のものを指し、これらが結びつけられる。スキーマは(12a)になる。(12a)ではカテゴリー X (太字表記)と、X の多様な定義の1つである個体成員 X_i (12)a. **CATEGORY(X)** b. **CATEGORY(X_i)** が前景化され(白丸表記)、両者が結びつくことを示している。



そして2つめのプロセスが(12b)になる。

(12b)では、 X_i がどのようなカテゴリー X なのかを規定する。いわばカテゴリー X の再確認・再定義部分になる。これは語用論的に意味が定まるところで、スキーマ表記される。(12b)の成員は、属性成員になる。(12b)ではいくつかの成員が前景化され、他は背景化される。これらは緒方(2006)では内部背景化と呼ばれたものだが、本稿では内部背景化は2種類に分けており、その

一つめになる。この2つのプロセスを経て、トートロジーの意味が確定する。この内部背景化(属性成員)には、大きく3種類ある。(13)に例を示す。

(13) a. ヒットを打ってこそ、大谷翔平は大谷翔平だ。

b. 投手として投げなくても、大谷翔平は大谷翔平だ。打率がすごい。

c. おにぎりの具がチーズでも、おにぎりはおにぎりだ。

一つめは(13a)のように前景化する属性を強調する場合である。「～こそ」などの表現がつく。強調されるのは典型的属性で、それ以外の属性は背景化される。典型的属性をもつものだけが、カテゴリー X だという狭い Xi になる^{*2,*3}。

二つめは背景化する属性を示す表現になる。「～しなくとも」などの表現がつく。この場合、典型的な属性の一つを背景化し、それ以外の典型的属性でカテゴリー X を定める。(13b)では投手という典型的属性が背景化され、より周縁的成員も取り込むことになる。

三つめは、(13c)のように周縁的属性に焦点をあて、その周縁的属性が、カテゴリー X の中に含まれることを伝える。本来であれば典型的な属性と反対の属性を持つものであっても、X に属すると述べる用法になる^{*4}。よって典型的な属性を強調する(13a)のような用法より、広い Xi となる。ただ3種類あるが、スキーマとしては同じ(12)になる。

なおこの属性成員には、制約がある。まず譲歩表現「としても」には、周縁的属性のみが現れ、典型的属性は現れない(cf. 小野・井原 2023 : 355)。典型的属性は譲歩せずともすでに含まれており、譲歩対象とならない。典型的属性は、あるのが当然なので表現しないか、「しなくとも」などの表現で典型的属性の一部を否定するかのどちらかになる。

(14) a. ?? 調子よかったとしても、大谷は大谷だ。(小野・井原 2023 : 355)

b. ?? ヒットを打ったとしても、大谷は大谷だ。 c. ?? ネズミを捕ったとしても、猫は猫だ。

また周縁的属性のみで、カテゴリー X を規定できない。(15)では周縁的属性を強調することで、それ以外の属性が背景化されている。ここでは周縁的属性のみが、カテゴリー X の判断基準となっている。しかしカテゴリーの再定義・再確認の中心には典型的属性があり、それをすべて排除して、カテゴリーを規定できない。

(15) a. ?? ヒットがない時こそ、大谷は大谷だ

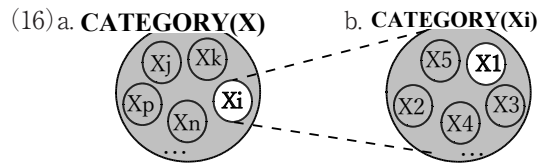
b. ?? ネズミを捕らないでこそ、猫は猫だ。

(14)(15)から分かることは、カテゴリー X の意味の流動性には、方向性がある。実際は段階的であるが、仮に典型的属性と周縁的属性に2分すると、常に典型的属性を中心に据え、周縁的属性へと拡張したり、縮小したりする。つまり全てと言わずとも典型的属性が含まれることが前提になっている。周縁的属性だけで X を規定できない。よって典型的属性を一部否定しても、他の典型的属性はそのまま中心に存在する。全部の典型的属性を背景化することはできない。

この方向性を維持しつつ、典型的属性を強調すれば小さな X、典型的属性を否定し周縁的属性を含み込めば広い X となる。カテゴリーは流動的ではあるが、中心に典型的属性を置いた状態で、その意味は広がり、多様な意味を持つと考える^{*5}。

5.2 個体成員の背景化 [内部背景化(個体成員)]

次に(8b)に相当するトートロジーを見ていく。スキーマは(16)で、ここでも2つのプロセスで意味が決まる*6。一つめのプロセス(16a)は、コピュラ文の同定表現としてXとXiを同定する。Xiは多様な定義のうちの一つになる(個体成員)。2つめのプロセス(16b)ではXiがどのような再定義かが示される。成員の背景化・前景化がおこる。(16b)では、カテゴリーXiの個体成員の一つ(X1)が選ばれ前景化され、他成員は背景化される。ここでもXi=X1と同定がなされる。



このとき(16b)での背景化・前景化には、XiとX1の並びの順番で、2種類ある。一つめは「XはXだ」の主語Xが個体成員X1で、述語XがカテゴリーXiになる。例を(17)に示す。

(17) 戦争で足を切断した夫に対して妻が、「あなたはあなたよ」と言う。

(17)では、カテゴリー〈夫〉の中の個体成員の一つが、今眼前にいる夫X1である。しかしX1は以前と異なり、足がない。昔を知る妻にとってはいわば周辺の〈夫〉である。それでもカテゴリー〈夫〉にしっかり含まれることを、トートロジーで表現している。

もう一つは「XはXだ」の主語XがカテゴリーXiで、述語Xが個体成員X1になっている。例として(18)がある*7。(18)では、主語Xが大統領というカテゴリーで、述語Xが現大統領というX1になっている*8。

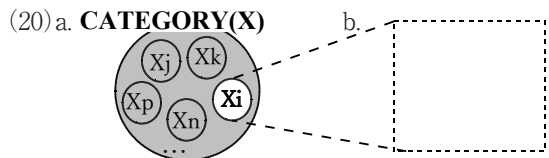
(18) 経済政策がかなり成功しているので、次回も大統領は大統領だ。

ちなみに「は」の代わりに「が」を用いると役割が逆転し、主語が個体成員X1、述語がカテゴリーXiとなる。(19)では、主語が現役の大統領(Xi)を指し、述語はカテゴリー〈大統領〉を指す。

(19) 経済政策がかなり成功しているので、次回も大統領が大統領だ。

5.3 他成員の背景化 [外部背景化(上位カテゴリーと他成員)]

3つめは(8c)に相当するトートロジーになる。ここでも同様に2つのプロセスが働く。一つめはコピュラ文を用いることから、カテゴリーXとその個体成員Xi(定義Xの1種類)を同定する((20a))。2つめはそのXiを語用論的に意味を確定する((20b))。ただ(20b)の部分は、いくつかパターンがあるので、未指定の状態にしている(未指定を破線四角で表記)。(20b)は後述するが、先回りして言えば、カテゴリーXの上位カテゴリーと他成員を背景化する。そのため、外部背景化(上位カテゴリーと他成員)と呼ぶ(〈〉部分は背景化するもの)。



例として(21)(22)がある。(21)はトートロジーが単独で現れ、(22)では連続して現れている。

(21) a. 大きいといっても、子供は子供だ。 b. 安くなっても、ロレックスはロレックスだ。

(22) a. しょせん、男は男、女は女だ。 b. つまるところ僕は僕、君は君だ。

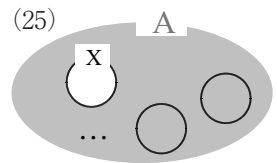
これらは緒方(2006)では外部背景化と呼んでいたものであるが、修正を加える。緒方(2006)では(23)に示すように、単純に、カテゴリー X 以外のものを背景化しており、上位カテゴリーを想定していなかった ((23)は(22a)のスキーマ)。



しかし背景化する他者は何でも良いわけではなく、近い、あるいは類似するものでなければならない。例えば(24)では、連続する2つに関連性がないため不自然な表現となっている。

(24) a. ??犬は犬、ペンはペン。 b. ??ダイヤモンドはダイヤモンド、風は風。(=(11))

(21)のように単体で現れる場合も同様で、対比され背景化されるものは、カテゴリー X と何らかの似たもの、あるいは関連性を持つ必要がある。関連することを、X と他成員のどちらも上位カテゴリー A の成員と考える。同じ上位カテゴリーの成員であれば、共通するものがあり、関連性を持つと考えられるからである。スキーマで示すと、(25)(26)になる。



これらが(20b)に入る。(25)は単体で現れるスキーマで、(21)で言えば [大きい] [安い] がカテゴリー A になる。(26)は2つの連続するトートロジーのスキーマになり、前半のトートロジーが(26a)、後半が(26b)になる。前景化・背景化が入れ替わる。上位カテゴリー A は、カテゴリーラベルが明確でない場合も多く、ラベル自体がないこともある。



しかし(25)(26)は、(10)と異なる点がある。

上位カテゴリーの境界線がなく、ラベルが薄い字になっている。これは上位カテゴリーが背景化され、認識されなくなっていることを意味する。外部背景化では、上位カテゴリーの存在を見直すという再確認・再定義が行われる。つまり、上位カテゴリーを強く背景化し、上位カテゴリーの存在を消す(認識しなくなる)プロセスが行われる。その結果 X とそれ以外の成員との関連性がなくなり、互いに全く別物という意味が生じる。成員 X と他成員のつながりを断ち切り、成員 X と他成員は別物で、関係がないことを強調する。X 内部ではなく、上位カテゴリーとの関係を再確認・再定義することで、X 自体を定義づける。ここでは上位カテゴリーの存在が〈ゆれ〉る。そしてこのゆれが、トートロジー発言の根拠となる。(25)では、X と他成員全部が対比される。一方(26)では成員 X と成員 Y のみが対象となり、この2つが交互に前景化と背景化を行うことで、X と Y が全く別物であることを強調する。

5.4 説明拒否の背景化 [内部外部背景化(上位カテゴリーと全成員)]

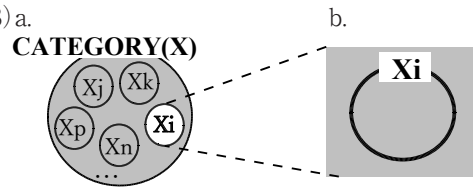
(27)のような再確認・再定義には見えない説明拒否のトートロジーがある(=(4))。というのも(27)ではカテゴリー X (姦淫、Y2K) について、聞き手は知らない。そのため5.1、5.2の内部背景化ではない。属性成員であれ個体成員であれ、X の中身が分からないため、成員を前景化・背景化ができないからである。また5.3の外部背景化にもならない。X 自体を知らないの、上位カテゴリーを想定できない。よって内部背景化、外部背景化に続く3つめの種類となる。

(27) a. 子供：姦淫ってなに？

母親：姦淫は姦淫。子供はそんなことは知らなくていいの。 (坂原 2002：107)

b. A：Y2K って何？ B：Y2K は Y2K だ。

このときスキーマは(28)になる。他の用法と同様、2つのプロセスが働く。一つめはコンピュータ文からくる同定の意味になる((28a))。二つめはXの再定義、再確認したスキーマとなる((28b))。



(28b)では、カテゴリーラベルだけが前景化され、残りはすべて強く背景化される。残りとはカテゴリー内の全成員とカテゴリー外(上位カテゴリーも含む)になる。そのため内部外部背景化(上位カテゴリーと全成員)と呼んでいく。(28b)から分かるのは、話し手・聞き手双方にとって共通認識できるのは、唯一カテゴリーラベルだけということである。よってラベル以外を全て背景化している。(27a)で言えば、〈姦淫〉というカテゴリーは、〈姦淫〉というカテゴリーラベルをもったものと再確認・再定義が行われる。つまりはカテゴリーラベルだけの再確認・再定義をしている。

このとき客観的には、聞き手だけでなく、話し手自身もXについて知らないかもしれない。その時でさえ、話し手と聞き手が持つ共通認識として、カテゴリーラベルは残る。話し手がXについて知っていれば、説明拒否となるし、Xについて知らなければ、ごまかしとなる。

カテゴリーXについては、カテゴリーラベルの情報のみを確認することから、トートロジーの中でも伝達する内容は一番少ない。ラベル以外は、話し手と聞き手で共有されておらず、Xを再定義したように思えないため、説明拒否となる。とはいえ2つのプロセスを経て、ラベルだけ前景化されたXiと再定義していることから、これもまたトートロジーと考える。

6. 5つの問への返答

ここまでの考察をもとに、5つの問いへの返答を試みる。まず(問1)トートロジーは何を契機として発話されるのか、である。本稿では契機は、カテゴリーのゆれと考える。カテゴリーのゆれをとめるために、トートロジーが用いられる。トートロジーは、カテゴリーの再確認・再定義を行うとした。この再確認・再定義がなぜ必要かと言うと、カテゴリーにゆれが生じたからと考える。

個別に見ると、内部背景化(属性成員)では、カテゴリーXでゆれる。Xの判断基準となる属性が何かでゆれる。内部背景化(個体成員)では、カテゴリーXが、どの特定成員を指すかでゆれる。外部背景化(上位カテゴリーと他成員)では、上位カテゴリーの存在の有無でゆれる。内部外部背景化(上位カテゴリーと全成員)では、カテゴリーXの内部と外部の存在(認識)でゆれがある。話し手には内部の成員は存在するが、すべて背景化してしまう。外部も同様で、上位カテゴリーの

存在も含めすべて背景化される。以上、トートロジーの契機は、カテゴリーでのゆれと考える。

ただし量の格率違反を完全に否定するものではない。同語反復のコピュラ文では、恒真文で無意味になりがちである。そのため別の意図・意味があると認識するのは、自然と言える。たとえ量の格率違反を最初の契機にするととしても、次の契機はカテゴリーのゆれと考える。実際(2)で示したように、ゆれが認めにくい場合、トートロジーとして不自然な表現となる。そして主語 X と述語 X は異なるものを指しているのではないかという推論が働く。この推論を通して、2つのプロセスへとつながる。一つはカテゴリー X と個体成員 Xi を結びつける同定文としてのプロセス、もう一つは再確認・再定義される Xi のカテゴリースキーマの中身決定のプロセスとなる。

次に(問2)トートロジーとは何かになる。形式的には、同一語表現を繫辞により結びつけた表現で「X は X だ」の形を基本とする。このとき主語 X と述語 X は異なるものを指し、両者を繫辞で結びつけ、カテゴリー X が個体成員 Xi (定義 X の 1 種類) であると同定する。これが1つめのプロセスになる。そしてカテゴリー X の再確認・再定義を経て、Xi の中身が定まる。これが2つめのプロセスになる。まとめるとトートロジーは、コピュラ文による同定表現で、カテゴリー X の再確認・再定義を行う構文となる*9。そして2つのプロセスを通して、意味が規定される。

具体的なプロセスは、内部背景化〈属性成員〉では、カテゴリー X の一つのパターンである個体成員 Xi を同定し、文脈等から基準となる属性成員を定め、再確認・再定義を行う。内部背景化〈個体成員〉では、同様に Xi を同定した後に、さらに Xi の中の個体成員 X1 と結びつけることで、カテゴリーの再確認・再定義がなされる。外部背景化〈上位カテゴリーと他成員〉では、Xi を同定した後に、上位カテゴリーを背景化することで、カテゴリー X が再定義される。内部外部背景化〈上位カテゴリーと全成員〉では、同じく Xi を同定した後で、カテゴリー内部の成員と、カテゴリー外部(上位カテゴリーも含む)を背景化することで、カテゴリー X が再確認・再定義される。ここではカテゴリー X は、カテゴリーラベルのみが前景化される。

また(問3)トートロジーの意味生成のプロセスはどのようなものか、がある。これは(問4)トートロジーは意味論と語用論のどちらで意味が決まるのか、とあわせて見ていく。意味生成プロセスとして、2つのプロセスを考えた。1つはコピュラ文からくる意味で、同定文としての機能がある。形式的には同一語の繰り返しとなっているが、主語 X と述語 X は別物を指し、両者を同定する意味を持つとした。主語 X がカテゴリー全体を、述語 X がカテゴリー X の 1 パターンである個体成員 Xi を指すのを基本とした。これはコピュラ文という形式からでる意味で、意味論的意味になる。2つめは、個体成員 Xi の中身を、X の再確認・再定義を通してスキーマで確定する。この再確認・再定義は、文脈等により、4タイプのうちどのタイプかが決まった。これは語用論的意味となる。

よって問3には、2つのプロセスがあるとの返答、問4には、意味論的、語用論的の双方の意味が組み合わせあって、トートロジーの意味が決まると考える。具体的なプロセスについては、(問2)への返答と重なるところが大きいので、省略する。

最後に(問5)トートロジーが話題を封じるのはなぜかであるが、一つには、「X は X だ」と恒真

を表現しているからと言える。表現的には、打ち消すことができない。それに加え、否定の含意があるからと考える。つまり聞き手のカテゴリーのゆれを強く否定し、再定義するところにある。

内部背景化〈属性成員〉では、周辺の属性または典型的属性を否定することで、Xの再定義を行う。内部背景化〈個体成員〉では、カテゴリー X 内の他成員を否定する。外部背景化〈上位カテゴリーと他成員〉では、上位カテゴリー A の存在を否定する。内部外部背景化〈上位カテゴリーと全成員〉では、X のカテゴリーラベル以外の存在を否定する。何かを強く否定することが、コンピュータ文と恒真の内容と相まって、聞き手に対して、それ以上の発話を終了させるという役割を担うと考えられる。しかも否定対象は、聞き手が抱く内容であり、それを恒真文で言い切りの形で発話され、否定されるために話題を封じると考えられる。つまり自分が抱くカテゴリー X に対する概念を否定する内容を、同語反復の恒真文で、反論出来ない形で発話されるため、話題を封じる働きが生じる。

7. ゆれの要因

トートロジー「XはXだ」は、上記でみたように4つのタイプがある。そして各々ゆれの内容が異なる。問題は、何をもって聞き手がどのタイプかを決定するかにある。むろんトートロジー部分は、同一語句を繋辞で結びつけただけの表現であるため、ここに手がかりは基本ない。とはいえ決まり文句としてトートロジーの表現が使われている場合、トートロジー部分だけで判断できる。例えば「約束は約束」「負けは負け」など決まり文句の度合いが高いものから「遅刻は遅刻」など容易にタイプが想起されるものであれば、トートロジーだけで判断できることも少なくない。

またカテゴリー X の成員が、属性成員であれ個体成員であれ、多様であればあるほど、トートロジーは適格となる。ゆれが生じやすいからである。こうしたカテゴリー X のゆれ幅は、文化や地域によって異なっており、同じ意味のトートロジーが、翻訳不可能になるのはこれが理由である。それと同時に、文化や地域によって、典型成員が異なることから、選ばれるタイプ傾向も異なってくる。文化や地域、ひいては言語によってトートロジー解釈に違いがでるのは、その言語におけるカテゴリー X のゆれ幅と、典型成員の違いによって生じてくると考えられる。とはいえ決まり文句的要因がなければ、トートロジーがどのタイプかは、文脈等にたよるしかない。それを本節で確認していく。

7.1 副詞や接続詞等

最初に、副詞や接続詞等によってタイプが特定されることがある。(29)のような表現があると、内部背景化〈属性成員 / 個体成員〉となる(例を(30))。こうした表現(接続詞(逆接)や副詞類)が、成員を想起させるからと考えられる。

(29) 「それでも」「だけでも」「けれど(も)」「まさに」「やはり / やっぱり」「いつも / 相変わらず

ず/いつまでたっても」など

(30) a. 昨年より打率は落ちたが、それでも大谷は大谷だ。 b. やはり子供は子供だ。

さらに外部背景化(上位カテゴリーと他成員)になる表現が(31)で、例を(32)に示す。

(31) 「所詮」「さすがに」「まがりなりにも」など

(32) a. 所詮、夢は夢だ。 b. さすがにプロはプロだ。 c. まがりなりにも、社長は社長だ。

これら副詞や接続詞等は、タイプ特定の助けとなるもので、トートロジー解釈に有効な手段となる。

7.2 譲歩、条件等の表現

何らかの構文で、トートロジーが用いられるとき、タイプが定まることがある。例えば譲歩表現で、トートロジーが用いられると、内部背景化(属性成員)となる。とりわけ典型的属性成員を否定したり、弱めたもので、カテゴリー X を再確認・再定義する。

(33) a. 補欠だとしても、合格は合格だ。 b. たとえ3ヶ月だとしても、留学は留学だ。

また条件表現でトートロジーが用いられても、内部背景化(属性成員)となる。これは周辺の属性も含めて、カテゴリー内の成員と見なすことを述べている。言い換えれば、周辺の属性であっても、カテゴリー X となる。

(34) 締切日が過ぎた翌日、担当教員にレポートを提出しにいったら、しぶしぶ受け取ってくれた。

学生：レポート受け取ってもらえた。 学生の友達：受け取ってくれたなら、提出は提出だ。このとき助詞に「が」が用いられると、内部背景化(個体成員)のタイプとなる。個体成員を同定する働きを示唆するからである。(35)では主語[大統領]が、現職大統領という個体成員を表し、述語[大統領]がカテゴリー全体(役割)を表している。

(35) 圧倒的な支持があるとすれば、次も大統領が大統領だ。

7.3 談話による文脈

三つめはもっと広く、文脈から定まる場合である。例えば説明拒否の例がそれで、聞き手がカテゴリー X を知らない文脈であれば、内部外部背景化になる。というのも X についての共有知識がないことになり、唯一名称だけ、すなわちカテゴリーラベルのみが前景化されることになるからである。例を(36)に示す。このように文脈により、4タイプが特定されていく。

(36) A：メタバースって何ですか。 B：メタバースはメタバースだ。

以上見てきたように、トートロジー以外の表現によって、タイプが定まる場合と、決まり文句として慣用的に用いられていけばトートロジーだけでタイプが定まる場合とがある。

8. まとめ

本稿はトートロジーの意味の生成過程を考察した。その中で5つの問に答えることを試みた。つまるところ、トートロジーはコピュラ文で、カテゴリーの再確認・再定義をする構文であるに

つきる。2つのプロセスがあるが、一つめはコピュラ文であることから、主語 X が述語 X であると同定する。このとき主語 X と述語 X は、異なるものを指していると考えた。通例主語 X はカテゴリー X、述語 X は、カテゴリー X の定義の一パターンである個体成員 X_i を表し、同定されるカテゴリーの再確認・再定義する構文となる。そして2つめプロセスで、X の再確認・再定義の内容が、背景化を通して行われる。全部で4タイプあり、そのうちのどれかにタイプが定まる。一つめのプロセスが意味論的、2つめのプロセスが語用論的だと述べた。そのためラディカル意味論と、ラディカル語用論の両方の要素を組み入れることとなる。同一語繰り返し表現は、トートロジー以外にも数多くある。それらとの関連を、今後の課題としたい。

注

- *1 むろん様々な分析、例えば拡大メンタルスペース理論、言語内論証理論、プロトタイプ意味論など、数多くの分析がなされてきたが、本稿とは直接関係しないので、考察対象とはしない。
- *2 A is A is A. のように、繰り返しトートロジーが表現されることで、典型的属性がさらに強調される表現がある (cf. 奥田 1983)。
- *3 「A の A」という表現でも、典型的属性に焦点を当てることができる。
 - (i) 浅倉大介「僕実はその辺が1番ツボなんですよ」マツコ「ダイスケのダイスケを刺激したのね」
(マツコの知らない世界「海外ディズニーリゾートの世界」(2024年4月16日放送))
- *4 「勝ちと言えば勝ち」のように、周辺的な成員であることを示唆する同語反復表現もある。
- *5 佐藤(1986)の意味の弾性の考え方に通ずる。
- *6 文脈によっては、複数の個体成員が前景化される場合もあるが、プロセス自体は同じとなる。
- *7 (i)では「やっぱり」が付加され、述語 X は大統領らしさを指し示すため、内部背景化(属性成員)となる。(cf. 坂原 1992: 64)。
 - (i) 危機的状况で、毅然と対応している。大統領は、やっぱり大統領だ。
- *8 坂原(2002: 128)の次の例(i)も、ここの用法に入る。
 - (i) A: メトニミってなに?
B: メトニミはメトニミだよ。昨日、授業でやったじゃないか。
A: ああ、あれね。
- *9 同語繰り返し表現は数多くあるが、その中であってトートロジーの存在意義はコピュラ文であることにある。そのため他表現との違いにおいて、コピュラ文が意味に関わることを示す必要がある。

引用文献

- Fraser, Bruce (1988) "Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies," *Journal of Pragmatics*, 12, 215-220.
- Gibbs, R. W., & McCarrell, N. S. (1990) "Why boys will be boys and girls will be girls: Understanding

- colloquial tautologies," *Journal of Psycholinguistic Research*, 19, 125-145.
- Grice, Paul H. (1975) "Logic and conversation," P. Cole and J. L. Morgan, eds., *Syntax and Semantics*, Vol. 3, 41-58. New York: Academic Press.
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. New York: Cambridge University Press.
- 緒方隆文(2006)「トートロジー：背景化による強調」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』(1), 31-47.
- 奥田隆一(1983)「同語反復と A is A is A 構文」『近畿大学教養部研究紀要』14(3), 69-81.
- 小野瞳, 井原駿(2023)「トートロジーにおける評価の意味と譲歩性」『第167回 日本言語学会大会予稿集』350-356.
- 坂原茂(1992)「トートロジーについて」『外国語科研究紀要』40(3), 57-83.
- 坂原茂(2002)「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」大堀寿夫(編)『認知言語学Ⅱカテゴリー化』東京大学出版会.
- 佐藤信夫(1986)『意味の弾性：レトリックの意味論へ』岩波書店.
- Wierzbicka, A. (1987) "Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics'," *Language*, 63(1), 95-114.
- Wierzbicka, A. (1988) "Boys will be boys: A rejoinder to Bruce Fraser," *Journal of Pragmatics*, 12(2), 221-224.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

